

## 使える短歌、使う短歌 植山俊宏

・みじかびのきやぶりきとればすぎちよびれかきすらすらのはつ  
ぱふみふみ

大橋巨泉 1969年

文語調だが、十分耳で聞くだけで捉えられる。短い挨拶にもつてこいの短歌である。いいたいことがコンパクトに聞き手に届く。一年前の三月、大学を退職する際に行つた最終講義の題を「黄金の釘」とした。「黄金の釘」は与謝野晶子の短歌に出てくる。

・劫初より作りいとなむ殿堂にわれも黄金の釘一つうつ  
『草の夢』 1922年

パイロット万年筆のCMで使われた短歌である。当時は小学生から大人までこの歌を口ずさんだ。誰もがパイロット万年筆を持つとすらすら書ける気分になつた。CM効果抜群だった。

教職も四十年を越えると挨拶も多くなる。手早く済ませたいが、聴衆の心に届くかがいつも気がかりになる。いい方法はないか。年に十回ほど出張授業に出向く東山中高校は知恩院系の私立男子校である。どの教室にも法然上人の和歌が掲げてある。

月影の至らぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ

「月影」を「仏光」ととると、「眺むる人」はその光明を受け止めようとする人の意味になり、結句は光明は眺むる人の心に澄み渡つてとどまるのだという仏恩を説いているということになる。仏教の教義の話ではない。上手に和歌を宗旨の説明に使つて見る例と考えるのである。これは見る者聴く者の心に届きやすい。

私が入学式などの挨拶でよく引く短歌に次のものがある。

・さいはひも憂ひもなべて新しく迎ふるときは厳しかるらし

佐藤佐太郎『歩道』 1940年

人生の一区切りの感慨を晶子は「黄金の釘一つうつ」と表した。私は自分の研究者人生の区切りを「黄金の釘一つうつ」と呼べるかと自問し、講義の内容とした。答えは、「釘一つ」つたが、「黄金の釘」とはいえない、であった。多くの聴衆に届いたようだ。

私事を連ねるが、十五年ほど前、大学の授業との併任で附属中学校の校長を務めた、挨拶の機会は多かつた。聞き手は中学生からその祖父母まで。次は保護者会の挨拶で用いた和歌である。

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

紫式部の曾祖父藤原兼輔の作。百人一首に「みかの原わきてながるる泉川いつ見きとてか恋しかるらむ」を残す三十六歌仙の一人である。左右が見えないほど我が「子を思ふ道にまど」うなどメッセージを和歌に託した。保護者には十分届いた様子だった。使える短歌、使う短歌を考えたい。短歌は生活よりも文化の世界のものと思いがちだ。が、文化の高尚さばかり追つていると先細りする。日々の生活に根付かせ、裾野を広げることを心がけた。皆さん、生活で使える短歌、使う短歌をお持ちだろうか。